

日本語を母語とする大学教員と日本語学習者の意見文における  
メタディスコースの比較  
THE USAGE OF METADISOURSE IN PERSUASIVE ESSAYS BY JAPANESE  
UNIVERSITY TEACHERS AND JAPANESE LEARNERS

小森万里, 大阪大学  
Mari Komori, Osaka University

### 1. はじめに

筆者は主に所属大学の協定校から来ている交換留学生や日本語・日本文化研修留学生のための日本語の授業を担当している。彼らの中には、日本語でレポートや論文を書き単位を取ることを目指すだけでなく、大学院に進学し本格的に日本語によるアカデミックな世界に入ることを目指す者もいる。しかし、日本語で話したり書いたりすることについてある程度慣れている彼らであっても、読み手に納得してもらえようように意見を書くことが難しいと訴える者は少なくない。そこで、日本語母語話者が意見を述べる際に用いている方策と学習者のそれとの違いを明らかにし、母語話者がどのようにして読み手を説得しようとしているのかを学習者に示すことは有用であると考えられる。

本研究は、その基礎的研究として、日本語学習者の意見文と日本語を母語とする大学教員が書いた意見文を比較し、意見の述べ方や認識の示し方の違いについて考察する。

### 2. 課題設定

説得的な文章を書く際、書き手は、読み手がどのような知識を持っているか、テキストに対してどのような反応をするかなどを予想して書く必要がある。Hyland (1994) が述べているように、アカデミック・ディスコースはただ客観的で情動的なものではなく、対人的スタイルで書かれるものであり、読み手を説得できるような方法で書く必要があるのである。

読み手の説得には、対人的メタディスコースが効果的に使用できるかどうかことが重要であるといわれる (Hyland, 1994, Hyland & Milton, 1997)。そこで、本研究では「日本語学習者と日本語母語話者とは対人的メタディスコースの使用に違いがあるのか」という課題を設定した。

### 3. 先行研究

Hyland & Milton (1997)、Hinkel (2005) によれば、英語学習者と英語母語話者によるアカデミック・ライティングにおいて、英語学習者が言及内容に強いコミットメントを表し問題点を誇張して述べる傾向があるのに対し、英語母語話者はその逆で、言及内容へのコミットメントを保留することが多い。また、アカデミックな場では発見したことを表すのに *Hedge* がよく使われるという研究もあり (Abdi, 2002)、アカデミックな場での意見の述べ方や認識の示し方において、確かさと不確かさをどう表すかがポイントになることがわかる。

日本語のライティングでは、石黒（2004）が、中国語を母語とする日本語学習者が「絶対、普通、結構」などの漢語副詞を多用する傾向があり、それらが誇張や思い込みといったニュアンスを感じさせるため、読者に違和感を生じさせると指摘している。また、伊集院・高橋（2004、2010）は中国語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者の意見の述べ方の違いを調べ、日本語学習者は相手に働きかけて共感を得ることを重視するのに対し、日本語母語話者は独断的に述べることで相手への押しつけを回避するとしている。相手への働きかけの度合いについては、小野（2003）が「わきまえ性」という概念を提示し、わきまえ性のある文末表現を使用すると意見の押しつけを避けることができ、わきまえ性のない文末表現を使用すると強い主張が行えるとしている。

このように、書き手は読み手を意識しながら自らの意見や認識をどう表現するかを選択するのだが、表現のしかたによっては、読み手を納得させられない場合がある。したがって、母語話者がどのように読み手を説得しようとしているのかを明らかにし、それを学習者に示すことは有用だと考えられる。

#### 4. 日本語における対人的メタディスコース

Hyland（1998）によれば、メタディスコースとは、ディスコースを明確に組み立て、内容や読み手に対する書き手のスタンスを伝えるものである。前者をテキスト的メタディスコース、後者を対人的メタディスコースという。本研究では、後者の対人的メタディスコースに分類される **Hedge** と **Intensifier** に焦点を当てる。この2つに絞ったのは、書き手が确实視している事柄に対する意見や認識を示す際、**Hedge** で表す場合と **Intensifier** で表す場合があるからである。どのような文脈でどちらを使用するのかが分かれば、学習者にとって役立つ情報となるだろう。

そこで、本研究では Hinkel（2005）と Hyland（1998、2005）を参考にして、日本語における **Hedge** と **Intensifier** を次のように設定した。まず、**Hedge** とは、命題内容に対する書き手のフルコミットメントを保留する機能を持つ語や表現のことで、4つの下位項目に分類される（表1）。また、**Intensifier** とは、修飾する要素の程度を強めたり、書き手の確信度を強調したりする語や表現のことで、4つの下位項目に分類される（表2）。表1と表2の分類に従い、日本語学習者と日本語母語話者が書いた意見文から **Hedge** と **Intensifier** を取り出し、その使用状況について考察することとした。

表1 Hedge の分類

Hedge の下位項目		例
認識的ヘッジ	書き手の知識の制限に言及する語や表現	おそらく、必ずしも、だろう、と思う、のではないか
可能性ヘッジ	見込み・確率の意味を含む語や表現	万一、かもしれない、～得る、可能性がある、恐れがある
緩和詞	言及内容の程度を減じる語や表現	単なる、やや、～にくい、とは限らない、場合もある
語彙的ヘッジ	数や量の範囲を定める語や表現	ある程度、多くの、少なくない、概ね

表2 Intensifier の分類

Intensifier の下位項目		例
増強詞	書き手が立場を1つに絞って述べる語や表現	どう考えても、当然、ざるを得ない、はずだ、といえる
増幅詞	程度・語彙的意味の強さの度合いを高める語や表現	あまりに、非常に、極めて、最も、～すぎ
強調詞	書き手の確信度や主張の重要性を高める語や表現	必ず、確実に、確かに、ちがいない、わけだ
全称性を表す語	「すべて」であることを表す語や表現	あらゆる、すべて、いつでも、どこでも、誰しも

## 5. 調査概要

### 5.1 調査対象者

調査対象となった日本語学習者は、平成27年度春学期に筆者が担当した「中級文法（レポートを書くための日本語文法）」を履修した16名である。

この授業の目的は、「日本語でレポートを書くためにおさえておくべき文法を学ぶことを目的とする。特に、留学生が間違えやすい文法に焦点を当てる。また、単一文で正確に作文できる文法力だけでなく、談話レベルでの文法力をつけ、日本語として自然な流れでわかりやすく、レポートが書けるようになることを目指す。」であり、授業で扱った文法項目は、助詞相当語の使い分け、「は／が」の使い分け、自動詞・他動詞・受身形・使役形、「ル形／タ形／テイル形／テイタ形」の使い分け、意見述べの文末表現であった。

表3は、学習者の国籍、母語、日本語学習歴、日本語のレベルをまとめたものである。

表3 調査対象者（学習者）

国籍(人数)	台湾(4)、ドイツ(4)、オーストリア(2)、アメリカ(1)、インドネシア(1)、韓国(1)、ブルガリア(1)、ベトナム(1)、ロシア(1)
母語(人数)	中国語(4)、ドイツ語(6)、台湾語(2)※、英語(1)、インドネシア語(1)、韓国語(1)、ブルガリア語(1)、ベトナム(1)、ロシア語(1)
日本語学習歴	1年9ヶ月～17年8ヶ月
日本語のレベル	旧3級合格～N1合格（当科目は選択科目であり、制度上、上級の学習者も中級科目の履修が可能であった）

※台湾語と中国語の双方が母語だと回答した学習者が2名いた。

調査対象となった日本語母語話者は大学教員である。大学教員はアカデミック・ライティングのエキスパートであり、通常日本語学習者に意見文やレポートなどを書かせる立場でもある。そのような母語話者が書く意見文を調査することで、母語話者が理想と考える意見や認識の表し方をみることができると考えた。表4は、大学教員の教育歴と専門分野をまとめたものである。

表4 調査対象者（日本語を母語とする大学教員）

大学での教育歴	2ヶ月～32年
専門分野	日本語教育・日本語学(15)、日本文化学(1)

## 5.2 意見文の課題

学習者に対しては、彼らが履修していた「中級文法」の授業の期末試験の一部として意見文を課した。下記の課題文 a、b から 1 つを選択して書く形式であり、a を選んだ者が 4 名、b を選んだ者は 12 名であった。解答用紙は A4 サイズの用紙に 26 行の罫線を入れたもので、13 行以上書くよう指示されていた。また、辞書の使用は可能とされていた。学習者は約 30～60 分程度で意見文を書き上げ、意見文の長さは短いもので 294 字、長いもので 726 字であった。

大学教員に対しては、学習者への課題文 b と同じものを与えた。また、文字数を 600～800 字程度とし、30～60 分程度で書いてもらうようにした。このようにして、学習者の意見文とできる限り同様の条件で意見文を採集した。

### 課題文 a

日本の小学校や中学校では「いじめ」が問題になっています。最近の小学生や中学生のことについて、あなたが知っている国や地域の状況を説明して下さい。そして、その状況がこれからどうなっていくと思うか、あなたの考えを書いてください。

### 課題文 b

「国際会議では英語を使った方がいい」という意見があります。このような意見の短所と長所を説明して下さい。そして、この意見に対するあなたの考えを書いてください。

## 6. 結果と考察

### 6.1 Hedge と Intensifier の使用状況

表 5 は、学習者と大学教員が書いた意見文の総文字数、総文数、総節数を表にしたものである。これを見ると、総文数に大きな違いはないが、総文字数、総節数が大きく異なっており、大学教員の方が複雑な文構造を用いているとわかる。

表 5 学習者と大学教員の意見文の長さや文・節の数

	総文字数	総文数	総節数
学習者	7749	213	429
大学教員	12595	246	809

また、表 6 は大学教員と学習者の Hedge の使用状況を表にしたものである。Hedge の総数や各下位項目の使用数は大きく違わないが、使用率をみると、学習者の認知的ヘッジの使用率が高い (72.6%) ことがわかる。これは、授業の中で「意見述べの文末表現」を扱ったことから、学習者が意識的に今回の意見文に使用したために高い使用率となった可能性がある。

表 6 学習者と大学教員による Hedge の使用数 (使用率)

	認知的 ヘッジ	可能性 ヘッジ	緩和詞	語彙的 ヘッジ	合計
学習者	69(72.6%)	16(16.8%)	8(8.4%)	1(1.1%)	95
大学教員	63(55.8%)	31(27.4%)	18(15.9%)	1(0.9%)	113

表7は学習者と大学教員の *Intensifier* の使用状況を示している。使用数の上でも、下位項目ごとの使用率の上でも大きな違いがみられなかった。

表7 学習者と大学教員による *Intensifier* の使用数（使用率）

	増強詞	増幅詞	強調詞	全称性	合計
学習者	19(43.2%)	11(25.9%)	8(18.2%)	7(15.9%)	44
大学教員	24(43.6%)	18(32.7%)	7(12.7%)	6(10.9%)	55

このように、*Hedge* も *Intensifier* も使用数や使用率では学習者と大学教員の間に大きな違いはなかった。しかし、学習者の意見文には、読み手を説得できないのではないかと感じさせるものがあった。では、大学教員と学習者とではどのような点が異なるのだろうか。

## 6.2 読み手を説得できない可能性のある表現

### 6.2.1 断定表現と *Intensifier* の共起

まず、書き手が常識だと認識しており、議論の前提にしようとしている事柄の表現のしかたについて、学習者と母語話者の間で違いがみられた。学習者は、英語が世界で一定の地位を占める言語であるという事実認識を述べる際に「国際語である」などの断定表現を用い、さらに、*Intensifier* を共起させている。例えば、例文(1)、(2)の「一番」は程度が大きいことを表す「増幅詞」であり、(3)の「全部の」は「全称性を表す語」である。学習者の *Intensifier* の使用は、言及内容が動かしがたい事実であり強調するに足るものであるとする書き手の態度が表されるため、書き手とは異なる事実認識を持っている読み手がいるかもしれないという配慮が感じられない提示のしかたとなっている。このように、議論の前提の段階で、読み手に受け入れがたいと思わせる認識提示があるために、意見文全体も説得性に欠けるという印象を与えるのではないだろうか（下線は筆者による。また、作文中の誤りは訂正せずそのまま掲載している）。

- (1) 一番大きな長所は、英語は国際語である。
- (2) しかし、英語は世界中で一番普及する言葉という事実も否定できない。
- (3) だいたい全部の国に、生徒が英語を勉強する。

これに対し、大学教員はいくつかの方法を用いて、読み手に受け入れられやすくなるような表現をし、認識提示を行っている。大学教員が用いていたのは、主に次の4つの方法である。

1つ目は、「つつある」を使用し、国際語だと断定するのではなく、国際語に近づいていると表現する方法である。(4)、(5)の例文がこれにあたる。

- (4) 英語は世界共通語となりつつあり、日本企業の中にも社内公用語を英語と定めたところもある。
- (5) 現在英語は世界共通語としての地位を確立しつつあり、非英語母語話者同士の共通語として英語を使用することが増えている。

2つ目は、国際語やそれに相当する語を括弧に入れる方法である。これによって国際語という語の意味を限定し、書き手による英語の位置付けについて認識が異なる読み手がいるかもしれないことに配慮を示している。(6)、(7)がこれにあたる。

(6) 国際化が進展し、英語が「国際語」の地位を固めつつある。

(7) 近年、世界中の多くの国でグローバル化が進み、英語はいまや「世界の公用語」となっている。

3つ目は、「多くの人に使われている言語である」と書き手の判断は含めず単に事実を提示する文として表現する方法である。もし、「最も多くの人に使われている」など *Intensifier* を共起させると、そこに書き手の判断が加わることになり、書き手と同様の認識をもたない読み手には受け入れがたいと予想されるため、このような文脈では *Intensifier* を回避しているものと考えられる。(8)、(9)がその例である。

(8) このように、すでにある程度の話者数を確保できている英語を共通語として使用することは非常に効率がいいと言える。

(9) さらに、世界における英語の使用者数からしても、国際会議の共通語として他の言語よりも利用しやすいと言えるだろう。

4つ目は、「一般的に英語は国際語だと認識されている」という表現のしかたをすることで、書き手自身の判断ではないことを示す方法である。(10)、(11)がその例である。

(10) 英語は現在、世界共通語として広く認識されており、英語母語話者でなくとも会議で通用するレベルで英語を使える人は多い。

(11) そんななか、国際語とも言われる英語を使用すべきという意見は多く聞かれるが、これには熟考の余地があるといえる。

このように、学習者は *Intensifier* を使って自らの認識の正当性を強調しようとするのに対し、母語話者である大学教員は、*Intensifier* を使わずに、断定を避ける、意味の限定を行う、他者の判断であると表現するなどの方法によって、議論の過程が読み手に受け入れられやすくなるようにしている。このような方法は、学習者に紹介すべきものの一つであると考えられる。

## 6.2.2 増強詞の使用

この節では、書き手が何らかの根拠から当然視している事柄として「はずだ」や「しかたがない」などの増強詞を使用したために、一方的な議論であり説得力がないと判断される恐れがある例を挙げる。

(12) 英語は共通語なので、多くの人は英語をわかるはずだ。したがって会議で

英語を使うと会衆がその言葉をわかるだろう。

(13)もう国際的な言語になっているから、しかたがない。

学習者は言及内容を当然の事柄として示すために増強詞を使用していると推測されるが、増強詞を使用することで、かえって論理的でないという印象を与えている。意見文のような説得的文章では、「はずだ」や「しかたがない」は読み手がどのような反応をするのかを考慮しない、わきまえ性のない表現として受け取られるのではないだろうか。一方、大学教員は同様の文脈で Hedge を使用している。(14)は認識的ヘッジの例である。

(14)現状、世界の多くの国々で第一外国語が英語であることを考えると、英語を国際会議の使用言語とすることは妥当であると考えられるだろう。

また、論題「国際会議では英語を使用すべきである」の反論にあたる意見を述べる場合には、(15)のような緩和詞や(16)のような可能性ヘッジが使用される。

(15)また、全ての通訳者が議論のテーマに精通しているとは限らないため、発話者の意図を 100%理解して、相手に伝えているかという点で疑問が残る。

(16)その結果、英語運用能力の低い参加者は不利益を被る可能性が考えられる。

Hedge は、ほかにも選択肢があることを示唆することができることから、読み手への配慮がうかがえるため、書き手とは別の意見を持つ読み手にも受け入れられやすくなる表現方法になると考えられる。このような効果を狙って、大学教員は意見を述べる際、異なる意見をもつ読み手がいることに配慮して Hedge を使用するのではないだろうか。

また、数は少ないが、大学教員が意見述べに増強詞を用いている例もあった。しかし、その場合も読み手への意見の押し付けを回避するような方法がとられている。例えば、「といえる」「と言わざるを得ない」は書き手の意見を一つに絞り、それを妥当なものとして提示する増強詞であるが、(17)では、認識的ヘッジ「だろう」を付加して断定を回避している。また、(18)、(19)では条件節と共起させることで、範囲の限定をした上で意見を述べている。

(17)さらに、世界における英語の使用者数からしても、国際会議の共通語として他の言語よりも利用しやすいと言えるだろう。

(18)その点では、参加者全員が英語に長けていて自らの意思をしっかりと英語で表現できるという条件がそろえば、英語使用は大変有効であるといえる。

(19)利便性や不公平性などさまざまな長所や短所が挙げられるが、現状を鑑みると英語の使用は効率的だと言わざるを得ない。

以上のことから、日本語の文章においては、Hedge の使用や、Intensifier と Hedge の共起、あるいは Intensifier と条件節の共起など、書き手の意見を受け入

れられやすくする方法がいくつかあり、これらを学習者に紹介することが有用であると考えられる。

### 6.3 文末における Hedge と文章構造との関連づけ

学習者の意見文の中には、事実提示文と意見提示文が区別されておらず、事実提示文の文末に Hedge や Intensifier を付加している例がある。例えば、(20)では認識的ヘッジの「と思う」、「ではないだろうか」、「と思わない」や、強調詞「わけである」が使用されているが、1行目の「と思う」、4行目の「わけである」、16行目の「と思う」を含む文は事実提示文であり、無標の形式によって提示をするほうが適切ではないかと思われる。

- (20) (前略) この意見に関して、長所も短所もあると思う。本作文では、このような長所と短所を説明する。そして、この意見に対して、私の意見を述べる。

国際的なかいぎではさまざまな国が参加するわけである。共通語としての英語を使うことになれば、全体的にも英語だけ使われるので、会議を行うスピードも下がる。会議中では、いつも多くの情報があげられる。会議が長い時間で延長されたら、皆に飽きる感じをさせる。また、英語を使うここになれば、そのことを分かる気持ちで英語力を補強することがひつよである。それは英語を使かわない国にとってはいいと思う。英語を勉強する力を強化するからである。

一方で、さまざまな問題もある。まずは、英語を勉強しにくい国には、問題になります。また、英語だけで使ったら、世界の豊富な言語が限られる。上に長所を述べたのに対して、会議では多くの情報があげられ、たいせつな所に分からないかったら、困るではないだろうか。私は、国際的な会議でも英語だけを使うべきだと思わない。それは、世界の豊富な言語情をなくしてしまうからだと思う。

奥野 (2012) は、ただ事実を述べる状況で「わけ」を用いると、相手が情報を持っていないことを想定しているように聞こえたり理屈っぽく聞こえたりする可能性があるとして述べているが、この議論は(20)でもあてはまり、事実提示文に強調詞を付加して有標の形式にすることで、単なる事実提示ではなく、書き手の何らかの想定を示しているのだと受け取られる可能性がある。また、同一の認識的ヘッジを事実提示文にも意見提示文にも使用しているために、文章構造がわかりにくくなる点にも注意が必要である。(20)の例では、引用節内が書き手の意見である9行目の「と思う」と15行目の「と思わない」のみを残すことで両文が各パラグラフの結論であることを明示することができるため、文章構造が明確になる。このように、文章構造を読み手にわかりやすく示すためにも、Hedge の使い方は重要だと考えられる。

一方、大学教員の例を見ると文章構造が明確になるような Hedge の使用をしていることがわかる。(21)では、事実提示文の文末は無標形式となっており、各



パラグラフのまとめで書き手の意見を提示する文に「であろう」が使用されている。そして、意見文全体の結論では「反対する」と書き手の主張が断定的に述べられている。

- (21) (前略) まず長所について二点述べる。一点目は、時間の短縮である。会議の場で通訳を介せば、その分の時間がかかるが、発言者自らが英語を使うことで、時間を有効に使うことができる。二点目は、情報を的確に受信者に伝えることである。通訳者が間に入ることで、発言者が意図した通りには伝わらない可能性があるため、発言者自身が受信者に理解可能な言語で伝えることが肝要であろう。

次に短所について二点述べる。一点目は、意思疎通が不十分になることである。会議とは情報の交換・議論・意見の集約が目的である。しかし、英語母語話者・非母語話者がともに、相手に十分に意思を伝えられず、かつ相手が伝えたい情報を十分に受信できなければ、会議の目的を果たすことができなくなる。二点目は、英語が堪能であるという理由だけで出席者が選ばれる可能性があることである。会議には、伝達技術が優れた者より、豊富な知識と判断力を持つ者が参加すべきであろう。英語が達者というだけで選ばれた場合、上辺だけの議論になり、長い目で見れば効率的であるとはいえない。

英語が「国際語」として認知されつつあるが、しかし、今こそ、この状況の是非を問い直す必要がある。効率的に議論するには、同じ言語を使用することが一見、最善の方法にみえるが、参加者が平等に参加できなければ、真の意味での効率的な議論を行うことはできない。よって、筆者は国際会議の場で非母語話者が英語を使うことに反対する。

ここから、意見文のように自らの意見を説得的に主張する文章において、母語話者である大学教員は、事実提示文と意見提示文の区別を読み手に明示していること、結論を導くまでの過程では Hedge を使って意見を述べることで読み手が書き手の議論の展開を理解し、受け入れやすくなるような下地を作っていること、最後に書き手の結論を述べる段階で、無標の形式によって断定的に述べるという文章構造をとっていることがうかがえる。

## 7. 結論と今後の課題

本研究では、日本語を母語とする大学教員と日本語学習者の意見文において、メタディスコースの使用に違いがあるかについて考察した。そして、①Hedge と Intensifier は、使用数や使用率の上では大学教員と学習者の間に大きな違いはないこと、②学習者の Intensifier の使い方には読み手を説得できない可能性のある表現となるものがあるが、大学教員は同様の文脈で Hedge を使用するなど読み手に受け入れられやすくなるような方法を用いていること、③大学教員は Hedge を文章構造と関連付けて使用していることの3点が示唆された。

今回は大学教員と学習者各 16名の小規模な調査であり、また、学習者が履修した授業内容の影響を受けている可能性も否めないため、本研究から得られた結果をそのまま一般化をすることはできない。今後は、調査対象者数を増やし、日本語を母語とする大学教員がどのように説得的に文章を書くのかということについて、詳細な調査が必要であると考え。その際、調査対象者の専門分野にも注意が必要である。また、メタディスコースの使用には学習者の文化的背景が密接に関わっているため、どのような背景の学習者が書いた意見文なのかについても慎重に吟味しなければならない。さらに、今回は **Hedge** と **Intensifier** に絞った調査を行ったが、これらの使用は他のメタディスコースとの関係の上に成り立っているとされるため、対人的メタディスコースの包括的な調査が必要である。

本研究の最終的な目標は、日本語のアカデミック・ライティングにおける対人的メタディスコースの使用がどのような体系になっているかを明らかにすることである。そこから得られた知見が、今後日本語によるアカデミックな世界で生きていきたいと考える日本語学習者にとって、どのように読み手を説得できるような文章を書けばよいのかについて考えるための一助になればと願っている。

#### 参考文献

- 石黒圭 (2004) 「中国語母語話者の作文に見られる漢語副詞の使い方の特徴」『一橋大学留学生センター紀要』7, 3-13
- 伊集院郁子・高橋圭子 (2004) 「文末のモダリティにみられる "Writer/Reader visibility" — 中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較 —」『日本語教育』123, 86-95
- 伊集院郁子・高橋圭子 (2010) 「日本語の意見文に用いられる文末のモダリティ — 日本・中国・韓国語母語話者の比較 —」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』36, 13-27
- 奥野由紀子 (2012) 「非母語話者の日本語コミュニケーションの問題点」野田尚史 (編) 『日本語教育のためのコミュニケーション研究』85-104 くろしお出版
- 小野正樹 (2003) 「『ト思う』と『のだ』について」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』18, 1-15
- Abdi, Riza. (2001). Interpersonal Metadiscourse: An Indicator of Interaction and Identity. *Discourse Studies* 4, 139-145
- Hinkel, Eli. (2005). Hedging, Inflating, and Persuading in L2 Academic Writing. *Applied Language Learning* 15, 29-53
- Hyland, Ken. (1994). Hedging in Academic Writing and EAP Textbook. *English for Specific Purposes* 13, 239-256
- Hyland, Ken. (1998). Persuasion and context: The pragmatics of academic metadiscourse. *Journal of Pragmatics* 30, 437-455
- Hyland, Ken. (2005). *Metadiscourse: Exploring Interaction in Writing*. London & New York: Continuum
- Hyland, Ken, & Milton, John. (1997). Qualification and Certainty in L1 and L2 Students' Writing. *Journal of Second Language Writing* 6(2), 182-205